

無痛分娩

産婦人科 診療部長
山本 哲史

2025年1月発行

私たちの産婦人科では、地域周産期母子医療センターとして周産期医療を、がんセンターとして婦人科がん治療を行っています。

また、ロボット支援下手術の導入に伴い、良性疾患のロボット支援下子宮全摘術や、骨盤臓器脱のロボット支援下仙骨靭帯固定術などに取り組んでいます。ロボット支援下手術の特徴は、開腹手術と比べて手術時の傷口が小さく出血量も少ないこと、患者さんの負担が軽減され社会復帰も早くなることなどです。

当院ではこのように、幅広く先進的な医療の提供が可能な体制をとっています。

はじめに

少子化・晩婚化が話題となって久しいですが、徳島県の出生数も2023年は4,073人と、この10年で28% (1,582人) 減少しています。一方、妊娠・分娩に関するニーズは多様化しており、その一つとして無痛分娩を希望される患者さんも増えてきています。最近の5年間では全国の分娩数に占める無痛分娩の割合は5.2%から11.8%と、年毎に増加しています(図1)。

	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年
全体	5.2%	5.0%	5.9%	7.1%	9.6%	11.8%
病院	4.5%	4.4%	5.3%	6.6%	9.3%	10.7%
有床診療所	6.1%	5.7%	6.5%	7.7%	10.0%	12.9%

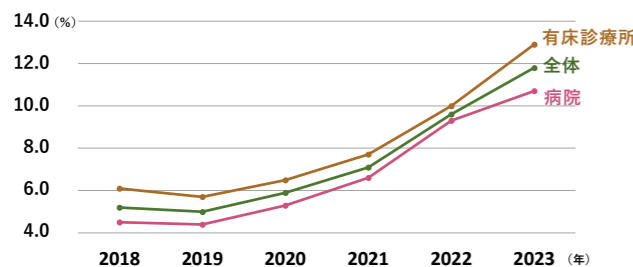


図1：全国の分娩数に占める無痛分娩数の割合の年次推移
出典：日本産婦人科医会ホームページ※1

当院でも患者さんのニーズに応えるべく、2023年7月より無痛分娩を提供するようになりましたので、当院における取り組みについてご紹介したいと思います。

当院での無痛分娩について

当院では、産婦人科専門医が主体となり無痛分娩管理を行っています。また、緊急時など必要な場合には、麻酔科をはじめ病院全体でバックアップする体制となっています。

分娩中は救急対応が可能な個室での管理が望ましいことと、ご家族と共に落ち着いた気持ちで分娩に取り組んでいただくために、陣痛から産後まで管理可能なLDR室ですごしていただきます。LDRは陣痛 (Labor)、分娩 (Delivery)、回復 (Recovery) の頭文字をとったもので、陣痛室・分娩室・回復室が一体となった個室のことです(図2)。

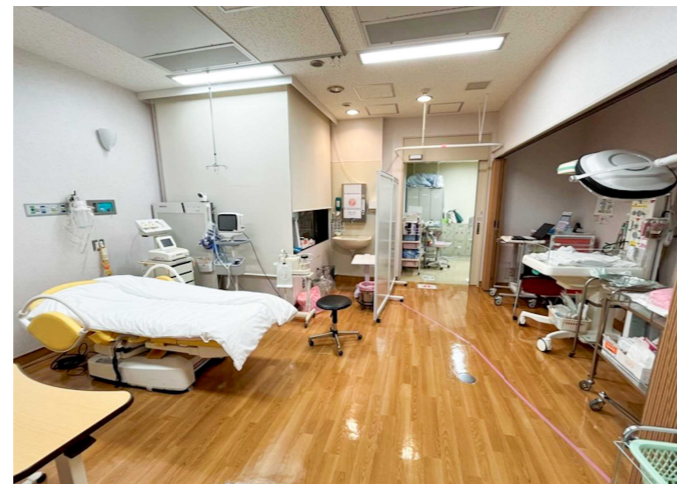


図2：陣痛室・分娩室・回復室が一体となったLDR室

無痛分娩は硬膜外鎮痛法を用いますが、当院では分娩予定日近くの平日日勤帯での計画分娩としています。

夜間・休日など硬膜外鎮痛法を行うことが難しい時間帯では、鎮痛剤(ペチジン)を注射することで疼痛管理を行うようにしています。陣痛に耐えられなくなったような場合でも、ペチジンを投与することで一定の効果があり、硬膜外鎮痛法ほどではないものの患者さん満足度も高い印象があります。

硬膜外鎮痛法

硬膜外鎮痛法では、背中に局所麻酔を行った後に穿刺針を背骨の中の硬膜外腔まで進め、直径1mm未満の細い管(カテーテル)を留置します(図3)。

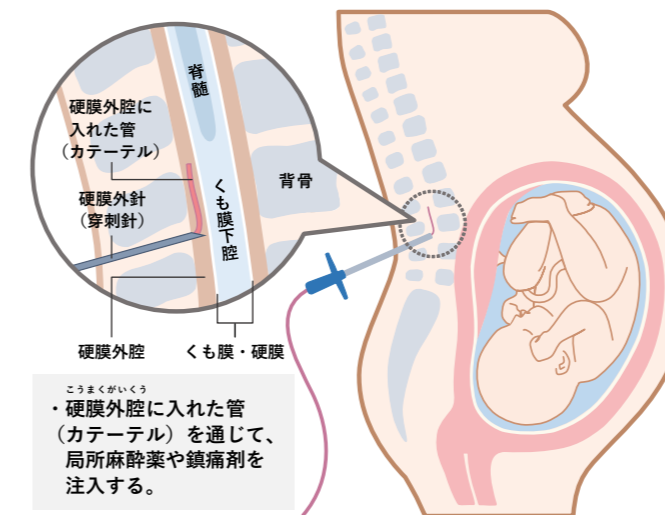


図3：硬膜外鎮痛法について

子宮の出口が3~5cm程度開き、妊婦さんが痛みを止めて欲しいと感じた時点で、カテーテルから局所麻酔薬や鎮痛剤を注入します。痛みの伝達をブロックすることで陣痛を緩和しますが、痛み以外の感覚は残り、足を動かすこともできる麻酔法です。

分娩の進行に伴って痛みが出てくる場合もありますが、薬剤の追加注入や追加処置などを行うことで対応します。

無痛分娩のメリット

何よりも大きなメリットは、お産の痛みが軽くなり身体的ストレスや精神的ストレスが和らぐことです。また、母体が分娩の痛みを耐えているときは赤ちゃんに届く酸素が減りますが、痛みの緩和で酸素供給量も改善されるといわれています。

体力の消耗や疲労が少なく産後の回復が早いということもあり、出産後の育児に早くから取り組めるというメリットもあります。

無痛分娩のデメリット

痛みが軽くなることはメリットですが、逆に必要な時にいきむことができず分娩時間が延長したり、吸引分娩が必要なことが増えます。ただし、帝王切開が増えたりすることはありません。

無痛分娩には、わずかですが合併症もあります。かゆみ・発熱・頭痛など一時的なものが多いですが、非常にまれに局所麻酔中毒や、全脊髄麻酔(くも膜下腔への麻酔薬の誤注入)、硬膜外血腫・膿瘍(カテーテルを挿入している硬膜外腔に血の塊ができたり、膿の袋が形成されること)、神経障害などの重い合併症もあります。赤ちゃんの誕生前に胎盤が子宮壁から剥がれてしまう常位胎盤早期剥離や、子宮破裂などの産科異常が麻酔によりわかりにくくなるともいわれています。

適切な対応で、これらのリスクが極力少なくなるように管理しています。

当院での無痛分娩を希望する患者さんへ

妊娠と診断されたら、かかりつけ医に無痛分娩の希望をお伝えください。かかりつけ医から当院へ、FAXで無痛分娩の予約が可能か問い合わせをいただき、返答するようにしています。また、同時に当院受診の予約もできるようになっています。

その後、当院で無痛分娩に関する詳しい説明をお聞きいただいたうえで、無痛分娩を希望されるかどうかを決めていただきます。

おわりに

今後も無痛分娩を希望される方は増えていくものと思われま。当院でも更に無痛分娩の研修体制を整えていき、より多くの医師やスタッフが対応することで患者さんのニーズに応えられるよう検討しています。安全を第一に考えた管理を行うことで、希望される患者さんに安心して無痛分娩を受けていただけるよう、努めていきたいと思ひます。

※1：日本産婦人科医会ホームページ内、「無痛分娩 産科施設の立場から〜日本産婦人科医会施設情報からの解析〜」4ページ (https://www.jaog.or.jp/wp/wp-content/uploads/2023/09/kisya_202309OG.pdf) を元に文字サイズ等を改変(許可取得済)